

まぎれもない真実なのです。

まぐまぐ殿堂入り・日刊メールマガジン
「今日のフォーカスチェンジ」第2357号
(2010年4月12日発行)より

5歳で亡くなった私の末の妹は、重度の脳性小児麻痺でした。その5年間、両親がどれだけ苦労したかは、想像に余りあります。けれども、思い返すと、そのころの家族の風景は、いつもなごやかで明るい光に包まれているのです。

妹のベッドは、玄関から入ってすぐの居間に置かれていました。窓ぎわのその場所には、いつもやわらかなひざしが注いでいました。ちょっと視線をまわせば、いつでも、妹の顔を見ることができたのです。

妹を中心にまわる時間は、いつも、おだやかさとあたたかさに満ちていました。父も母も、妹のそばで、けんかするなんてこと、考えなかったらと思うのです。実際、私も、両親から

どなられた記憶が、ほとんどないのです。

目も見えない、耳も聴こえない、話もできない、手足さえ自分の意思で動かすことができない…。もしも、何かができるとか、できないとか、人間の価値であるとしたなら、妹は、何ひとつすることはできませんでした。

でも、妹は、私たち家族に、一生忘れることのできない、何かを残したのです。何十年経っても、こうして思い出すことができるほど、幸福な記憶を…。

こうして書いてきて、ふと思いました。妹は、たしかに何ひとつできなかったのですが、なかでも、絶対にできなかったことが、「自分を否定すること」ではなかったかと。

妹の澄んだ、澄みきった瞳を、私は、いまでも鮮烈に覚えています。何も見えないがゆえに、何もわからない

がゆえに、妹のころは、その瞳のように、ずっとピュアなままだったと思うのです。

一方で、私たちは、生きていくうえで、傷つき、苦しみ、自分や他人を受け入れることができなくなり、そのピュアな部分をどんどんなくしていきます。自分をとるに足らないもののように思いこみ、自分の尊厳を、どんどん手放していきます。

そんなとき、妹のあのピュアな瞳を思い出すと、はっと、胸を衝かれる思いがするのです。どんな自分もまるごと受け入れること。自分を否定しないこと。ただ、それだけのことが、まわりを、どれだけ幸福にしてくれるか…。

たとえ、妹のそれが、病気によるものだったとしても、私たちが受けとった、あの幸福な時間は、永遠に変わることはありません。だとしたら、それは、まぎれもない真実なのです。

ゆっくりと考えてみたいと思います。

私たちが、日常のなかで、価値だと思っていることが、本当に価値であるのか。私たちが、日常のなかで、切り捨てているものが、本当にそれでいいのか。そして、もう一度、立ち返りたいと思うのです。どんな自分でありたいのか…

妹のあのまなざしが、いつでも背中を押してくれます。自分を受け入れて生きていいんだよと、永遠の記憶の彼方から、メッセージを、送りつけてくれます。

だから、歩きだします。ありたい自分に向かって。妹が、存在をかけて伝えてくれた真実を、胸に刻みこみながら…。

●日刊メールマガジン「今日のフォーカスチェンジ」(かめおかゆみこ編集・発行)は、2003年11月1日創刊。2010年2月、2300号達成。3秒で読める携帯版もあり。無料講読は「かめわざ快心塾」から♪

<http://kamewaza.com/>